

ISSN0286-312X

専修大学社会科学研究所月報

No. 494

2004. 8. 20

1990 年代末以降の中国司法の人的力量の向上

高見澤 磨

序

拙著『現代中国の紛争と法』（東京大学出版会、1998 年）は、中国における紛争解決は、理を説いて解決しようとする第三者（説理者）と理を説かれて心から服することを表明する当事者（心服者）とからなる説理心服劇であること、しかし、そのことは和を貴ぶ儒家思想だけでは説明できないことを試論した。

説理心服の場には、人民調解委員会のような調停的活動（１）を主任務とするものだけではなく、人民法院における調解、判決・強制執行過程における説得、仲裁における調解、行政機関における調解、弁護士・公証処による調解などがある。

こうした網が形成されていることは、しばしば和を貴ぶ儒家思想や人民内部の矛盾は批判・教育などで処理するという中国社会主義から説明されてきた。これらの思想的背景からの解釈の有効性そのものを否定はしない。しかし、もし和を貴ぶという文化があるのなら、なぜ紛争が生じるのか、という素朴な疑問が生じる。

拙著では、司法力量の欠如、判決では解決できない紛争形態、民事的な紛争も処理を誤ると刑事的な事件にまで激化しかねないとする紛争認識の三者によって、説理心服劇が演じられ

目 次

序	1
一 改革と人事	2
二 人民法院	4
結	6
編集後記	12